

作文 5

福留 伸子

Composition 5

FUKUTOME Nobuko

週1コマ (10週)

登録者数 20人前後

レベル 中級前半

目標

このクラスでは、初級または中級前半程度の学習を終了した学習者が、中級レベルの文法、表現を正しく使いながら、さらに上級レベルを目指して作文が書けるようになることを目標としている。

特に、学部や大学院の授業で必要なレポート・論文を書くための備えとして、1. 常体で書くことになれる 2. パラグラフを意識して論理的な展開ができるよう考えて書くということを基本的なねらいとして全体を通して練習させる。

授業内容

以下に示したように、数種類のタイプのモデル文章を読みながら展開の仕方や特徴を学び、それを参考にしながら実際に自分で課題作文を書いてみる。初めの2回はこのコースで目的としている常体の文で書くことと、パラグラフを意識して書くことの指導に当てている。課題作文はふつうは授業外での課題となる。

学期の半ばでそれまでに学生の作文に出てきた誤用だけを取り上げて、「誤用から学ぶ」という授業を行うこともある。また、実用的なものとして「手紙の書き方」を要望に応じて行う学期もある。

<モデル文>

1. 常体の文
2. 中心文のあるパラグラフ
3. 影響を受けた人の紹介文
4. 歴史的な変化を説明した文

5. 改まった形式の手紙文
6. 抽象的な考えを述べた文
7. 意見を述べた文
8. 数量グラフの説明文
9. 数量グラフを見て分析結果を述べた文

課題作文

考えたことを適切に表現する日本語力がまだ十分に備わっていない留学生にとって、書くことは実際的にも気持ちの上でもかなり負担である。そこで、課題作文はできるだけ学生自身にとって身近なテーマで、書くことに負担をあまり感じさせない動機付けの容易なものから、次第に客観的、抽象的なものへと移行させたつもりである。

宿題として書いてくる課題の内容は、以下のようなものである。

<課題作文>

1. 客観的に自分を紹介する
2. 道案内を書く
3. 影響を受けた物や人を紹介する
4. 身の回りでみられる変化したことがらを説明する
5. 最近深く考えたことを書く
6. 数量データを使って述べる
7. 分析したこと述べる
8. 自国の問題について書く

作文の訂正

各学生が到達している文章表現の力にレベル差があり、それまでに作り上げられてきた文章のスタイルにも違いがある。さらに学生が書こうと意図した内容が教師にとって不明な場合もあるので、それらを踏まえて指導するには、個別に面談しながらの添削が理想的である。しかし、1クラス15~20名の学生の作文を、毎回、面談しながら1コマで添削することはどうしても時間的に不可能である。そこで学生が提出した作文に訂正記号を記入し、学生はそれに基づいて書き直しをしてくるようにした。また自力で訂正できない場合のために質問を受け付ける時間を、コース後半の授業ではクラス時間内に設けた。

提出された作文に、教師が訂正記号を記入する。同時に、訂正しなければならない分量によって「再」(=もう一度全体を書き直す)または「訂」(訂正記号のしるしのついた箇所だけを書きなおす)の印をする。その指示に応じて学生は書き直して再提出す

る。

2回目に提出された作文については、訂正箇所が大体5カ所以下におさまれば「合格」とされ、訂正すべき箇所には正しい表現または語彙が記入される。しかし、5カ所以上訂正箇所がある場合は、訂正記号と教師の訂正の両方混じったものが返却され、再度訂正して出さなければならぬ。

原則的には以上のように方法をとるが、簡単な訂正記号を見ただけではその学生の日本語既習能力で訂正が困難だと予想される場合には、1回目から訂正記号だけでなく妥当な「語彙」「表現」を書き記すこともある。

また当該レベルで当然習得しておくべきだと見られる文法事項であるにもかかわらず訂正できていない場合には、教師が簡単な解説を記し、それを使った短文作成を宿題に課すこともある。

誤用の整理

学期の半ばで、それまでに見られた誤用の中から基本的な間違い、共通して見られる間違い、特に注意しておきたい間違いなどを取り上げて、クラス全体で正しい文法や表現の仕方を考える作業をしている。そのとき、誤用例、訂正例はコピー資料を配布するか、OHPで示している。

母語の同じ学習者同士による誤用チェック

中国や韓国または英語圏など同じ母語の学習者が複数いる場合は、母語別に2、3人のグループを作らせ、お互いの間違いを見て、それが母語からの翻訳違いや発想の違いによる場合があることを発見させる。

誤用の原因を見つめるこうした作業によって、日本語による正しい表現がより強く意識できると思う。